名古屋芸術大学研究紀要第44巻　245～261頁（2023）

岡山県の綴方教育の普及に努めた時本堅の研究

Research by Katashi Tokimoto, Who Worked to Composition Spread Education in Okayama Prefecture

鎌倉　博　*KAMAKURA Hiroshi*
（教育学部）

１．本稿の目的

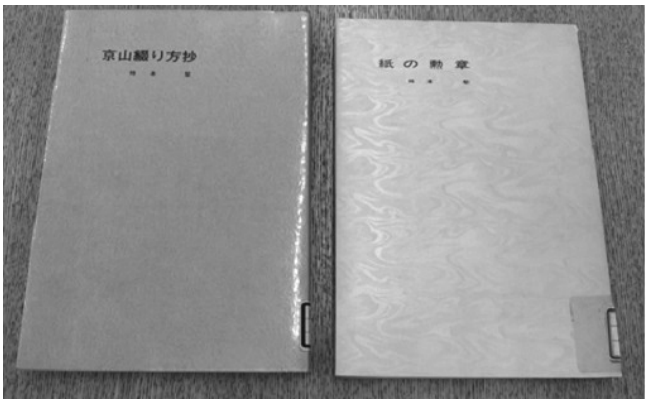
筆者はこれまで岡山県に特段の縁がなかった。ところが、研究交流でつながった岡山県赤磐市在住の元小学校長松本達郎氏が、岡山県で綴方教育の普及に努めた時本堅（ときもと・かたし　以下時本）の資料を送って下さった。それを読むうちに、戦前から戦後にかけての波乱の時代に、困惑もしながら綴方教育の普及に努めてきた１人の教員に焦点を当てて研究してみたいという衝動にかられた。

教師論として取り上げられる人物となれば、教育実践において偉大なる貢献をしてきた人物が取り上げられる。しかし、これまで子どもたちに関わってきた無数とも言えるであろう教員は、社会の動向に翻弄もされながら、自分の思い描く教育像を展開しようとしてきた。松本氏が提供して下さった資料を読む限りにおいて、時本はまさにその典型的な教員であったと同時に、それでも岡山県の綴方教育の普及においては多大な貢献をしてきた人物であったと筆者は捉えた。

そこで、時本の現存する出版物に当たりながら、氏が目指した教育の姿とはどのようなものであり、それを仲間と共有しながらどのように実現しようとしていたのか、しかし社会の波乱の中でいかにもがき、戦後においてはどのように初志を実現しようとしていたのかを明らかにしていくことにした。そうして、この研究を通して時本が大事にしようとしていた綴方教育が、今後の日本の教育にどう継承されていくべきかを検証し、まとめてみたいと考えた。

なお、本研究は、岡山市立中央図書館で所蔵されていた以下３点の文献に基づくものである。

① 『紙の勲章　自伝』昭和45年９月30日（203頁　21×15cmサイズ）
② 『京山綴り方抄　私版』昭和58年２月10日「八十歳の日に」とある（243頁　同上サイズ）
③ 『綴方岡山』昭和11年10月25日　編輯兼発行者：時本堅　発行所：岡山県綴方同人会（36頁　22.5×15cmサイズ）



２．時本堅の生涯分析

⑴　教育者としての時本堅の略歴

時本自身の自伝的実践記録である『紙の勲章』（以下勲章）及び『京山綴り方抄』（以下京山）にある本文、並びにその巻末に記載されていた「年譜」「小さい業績」を参考にして、以下をまとめた。本文に明記されていない年齢は「推定」とした。なお、同じ内容と思われるものの一部に記載年や発表主題で違いがあった。それらについては全体の記述から判断した。

1903（明治36）年　出生
1909（明治42）年　岡山県赤磐郡（現赤磐市）軽部尋常小学校に入学
1918（大正07）年　岡山師範学校に入学（15歳）
1922（大正11）年　岡山師範学校を卒業（19歳）
1923（大正12）年　赤磐郡黒本尋常高等小学校に訓導として着任
　　歩兵第54連隊第４大隊内務班に短期現役兵として入営（20歳）
1925（大正14）年　上道郡（現岡山市中区）富山尋常小学校に着任（推定22歳）
1927（昭和02）年　岡山師範学校附属小学校に着任（推定24歳）
　　岡山県初等綴方教育研究大会にて生活綴り方で研究発表
1932（昭和07）年「綴り方合評の会」の取り組みが始まる（推定29歳）
　　『綴り方倶楽部』発行
1935（昭和10）年『綴方岡山』発行（推定29歳）
1941（昭和16）年　児島郡（現岡山市南区）灘崎尋常小学校・青年学校長（38歳）
1946（昭和21）年　吉備地方事務所教育課長（推定43歳）
1947（昭和22）年　倉敷市立万寿小学校長（推定44歳）
1950（昭和25）年　岡山市立南方小学校長（推定47歳）
1952（昭和27）年　岡山市立石井小学校長（推定49歳）
　　岡山作文の会会長

1953（昭和28）年　岡山市教育委員会学事課長（推定50歳）
『作文岡山』発行
1954（昭和29）年　岡山県小学校国語教育研究会長（推定51歳）
『県国語』発行
1955（昭和30）年　『働く子どもの作文』出版（推定52歳）
1956（昭和31）年　岡山市立鹿田小学校長（推定53歳）
岡山市薄弱児育成会長
1958（昭和33）年　日本作文の会と読売新聞から表彰される（推定55歳）
1960（昭和35）年　岡山県小学校長会長・全国連合小学校会理事（推定57歳）
西日本作文教育研究集会で大会長
1961（昭和36）年　退職（58歳）
岡山作文の会会長引退・顧問に就く
朝日新聞児童詩選者に就く
1966（昭和41）年　『教育時報』に「我が教育生活」を連載（推定63歳）
1967（昭和42）年　『作文と教育』に「岡山県生活綴り方運動史」を掲載（推定64歳）
1970（昭和45）年　『紙の勲章』出版（推定67歳）
1977（昭和52）年　『生活綴方』に「生活綴り方は生きている」を掲載（推定74歳）
1978（昭和53）年　『生活綴方』に「生活綴り方の復活」を掲載（推定75歳）
1982（昭和57）年　『京山綴り方抄』出版（80歳）

⑵　教員への道を模索し始めた師範学校生時代

時本は、一般的に多感な思春期とされている15歳のとき、岡山師範学校（以下師範学校）に入学した。時本は、当時の心境を「何とはなしに」「何となく」進学したと記述している（勲章 p. 19）。以上のことから、当時の時本は教員を目指すことを明確な目標にしていたわけではなかったと推察される。しかも、「成績からいっても、実行力からいっても二流の生徒であった」と否定的に自己分析している（京山 p. 163）。

しかし、師範学校の「先生方は、担任教科の立場からわが田に水をひき、教科を通して若者の眼を開いて呉れた」（勲章 p. 22）。そうして入学後２年経つ頃には「知性的なもの、それゆえに依こ地なものや浪漫的なものを好み、貪るように読み耽った」（勲章 p. 23）とある。師範学校の個性的な教育によって物事を深くとらえたり、寮生活の中で読書に浸ったりしたことが、その後の時本の人生に大きな影響を与えたと推察される。

また、「わたし達は人生とは何か、自己とは何かという問題について悩みを知り、個性とは何か、教師とは何かという方向に進み、いつもむっつり考え込むようになった」（勲章 p. 23）と記述されていることから、この頃に教員としての立身の夢を持ち始めたのであろう。

そうして、師範学校入学前には将来への明確な目標があったとは言えなかった時本が、退職後には「「太く短かく」というより「細く長く」というのが、小学校教師の生き方であると信じるようになったのも、この二流意識に基づくもの」（京山 p. 163）と自己分析していることから、「二流意識」は退職後には再評価する変貌も見せている。

時本は、教員となって様々体験する中で内的成長を見せていく。時本にとって転機となる出来事を節を設けて引き続きまとめていく。

⑶ 学級文化活動に意欲を燃やした時代

その後体調を崩した時本は1922（大正11）年末に岡山師範学校を卒業し、年明け早々に「山の村」（勲章 p. 30）にある赤磐郡黒本尋常高等小学校（以下黒本小）に訓導として着任した。

ところが、着任校の５年生児童は、時本が思い描いた姿には程遠く、経済的貧困を象徴する姿であった。また、児童間の「まとまった精神的結合というものは少しもない」様子であった（京山 p. 154）。その児童との出会いは、当初の時本には失望感だったようである。「師範学校を卒業したばかりの、夢多き青年教師であるはずのわたしは、ここで精神的にも生活的にも、孤独というものをしみじみと経験した」（京山 p. 155）とある。

そうした中での冬、書店で『赤い鳥』を手にした時本は、その世界に惹かれ、「受け持ちの子に童謡を歌わせ、自由詩を書かせ自由画や綴り方を作らせよう」（京山 p. 155）と考えた。そうして、先輩教員の「清潔で閑静なところがよい」という教室観に対して、「教室は子どもの仕事場です。生活の場です。少し位にぎやかなのが当然です。」と抗弁するほどに、「仕事場」「生活の場」としての教室・学級をつくろうとした。その後時本は、オルガンを弾いて歌い、テンペラでの写生や自由画、綴り方や観察記録などを書くことを重視し、その作品を「天井にも、廊下にも」掲示するようになった（以上京山 p. 156）。

当時の時本は、豊かな学級文化活動に教育の魅力を感じ、「文字どおり学級にたてこもった」（京山 p. 156）。『赤い鳥』との出合いは、時本がもっていた孤独感をしだいに和らげ（勲章 p. 35）、「こどもといっしょの生活、つまり教育そのものに熱中する」（京山 p. 35）ようになり、「夢多き青年教師」としての意欲を開花させていった。

「こどもといっしょの生活」への意欲は、着任当初もった侮蔑的な児童の見方をも転換させたのであろう。「校医さんのところへ、洗顔用のほうさん水をもらいに」行くなど、児童を救済する姿勢を見せるようになる。そうした真摯な教育姿勢は保護者にも伝わったのであろう。「おひるに、弁当のない子と冷や飯みそ汁をかきこんでいると、父兄が太い沢庵を十本ばかり恵んでくれた」と記されている。その結果、児童も時本に対して「少しずつ、唇を開くようになった」（以上京山 p. 156）とある。

⑷　綴方教育に意欲を燃やした時代

鈴木・浦川の研究（以下鈴木・浦川）によれば、1918（大正７）年に岡山市教育会が「自由選題綴方」に取り組んでいた芦田恵之助を講師に招いて、１週間国語科講習会を開催した。その影響を受けて岡山県下でも自由題の綴り方が普及され、『赤い鳥』に岡山県の作品が多数入選していたようである。

『赤い鳥』に影響を受けていた時本は、学級文化活動の１つに「綴り方」も取り入れていた。時本は『赤い鳥』を通して、綴方教育への関心を高めたと推察される。1925（大正14）年に時本は上道郡（現岡山市中区）富山尋常小学校に着任したが、そこでは「「文集作り」を始めた」と記されている。当時は、「「文集作り」という綴り方教師の仕事が広く行われておらず」（京山 p. 158）の時代であった。

そうして、指導に当たった児童の自由詩が『赤い鳥』や『鑑賞文選』に入選するようになり、綴方教育実践に「少しずつ自信を高める」（京山 p. 158）ようになっていた。

しかしその時本は、当時読み始めていたと思われる『鑑賞文選』に「むんむんするような地方地方の香りと、たくましく成長する子どもの生活の意欲があふれていた」と感じるようになる。そうして、「「赤い鳥」に足りないもの」（京山 p. 159）」を児童に求めるようになったとされている。『赤い鳥』の綴方教育を含む大正自由教育は一世風靡されるほどに日本の教育において積極的に評価されてよい点を持つ反面、戦後その限界と課題も指摘されるようになった。しかし、時本は『赤い鳥』が一世風靡されていた時代にすでにその限界と課題を感じ取っていた。そこにはもう一方の読者であった『鑑賞文選』、またこの当時に目にしていたと推察される、後述する「左翼の本や雑誌」（勲章 p. 66）に触れることで、生活リアリズムに関心を深めていたことが影響していたのであろう。

⑸　独自の生活綴方に目を向け始めた時代

時本は、1927（昭和２）年に岡山師範学校附属小学校（以下附属小）に着任した。その年、岡山県初等綴方教育研究大会が行われた。

その頃、これまで全国に大きな影響を与えていた『赤い鳥』による綴方教育は、「唯美主義的であるとされ、次第に綴方指導の大勢は「生活」を標榜する綴方実践へ」（鈴木・浦川 p. 126）移行しつつあった。実際、1929（昭和４）年には小砂丘忠義・野村芳兵衛・峰地光重・上田正三郎・小林かねよらが参加した『綴方生活』が創刊される。

そのような影響を受けたのであろう、同研究大会では「岡山県で生活指導ということばがはじめて使われた」（京山 p. 109）とされている。また、ここに参加した「県北の小学校長俳人」として紹介されている正村隆の「山の村の子どもの作品でもの申す」報告が「会員の胸を激しく揺さぶった」（京山 p. 109）とされている。「こどものなまの生活」「こどものなまのことば」（京山 p. 109）への着目が、岡山県でも教育実践研究の焦点になってきたことが窺える。

時本は、同研究大会で「綴方教育における生活指導の理論的統一とその展開」（京山 p. 110　同一と思われる文書は p. 200「小さな業績」では「綴方生活指導の理論と展開」とある）を発表した。当時の綴方教育を巡る様々な動向に影響を受けたのであろう、「生活をみる綴方」（京山 p. 110）の定義と展開を報告したようである。

その時本は、1930（昭和５）年に東京高等師範学校（以下高師）で行われた全国訓導協議会国語大会（p. 200「小さな業績」では「国語教育研究大会」とある）で、「生活組織の綴方理論と指導体系」（京山 p. 111　同一と思われる文書は p. 123では「生活を組織する綴り方理論」p. 160では「生活組織の綴り方教育理論と実践」p. 200では「国語綴り方生活指導組織と実践案」とある）を発表した。このことから、師範学校同士の切磋琢磨があったことが推察されるとともに、東京に出向いて実践報告したように岡山県を越えて全国の研究同志を意識するようになったことが窺える。

そうして、「子どもの理解力・表現力とか、発達の心理などについて」熱心に発言し、「バイブル」的存在として崇めていた田中豊太郎（京山 p. 161では戦前戦後の初等国語の学習指導要領を「改訂ごとにまとめた方」として紹介している）・千葉春雄（東京高師附属小学校教員で退職後に雑誌『教育・国語教育』や児童向け雑誌『綴り方倶楽部』等を創刊）らと親交の機会をもつようにもなった（以上京山 p. 123）。

時本はその縁で、千葉が創刊した『教育・国語教育』や『綴り方倶楽部』に「生活綴り方の指導組織と実践」「調べる綴り方の実践組織とその展開面」「綴り方教育の外部的方法」「問題の綴り方作品論」などを寄稿した（京山 p. 161及び200）。その内容とは、「正常綴り方―とくに生活の実態と子どもの考え方に応じて、子どもを取り巻く生活事実を、子ども自身に組織し表現させる綴り方、発達の段階をつかんだ指導を強調し」たものとされている。1933（昭和８）年には、その千葉と共著で『新綴り方読本』（p. 200　同一と思われる書物は p. 114では「新綴り方の文話と文例」となっている）を出版している。綴り方を主題にして報告・出版するほどに実践課題を綴方教育に焦点化したこと、同時にその綴方教育について全国の研究同志に発信するほどに一定の自信と確信をもったことが窺える。

ところが、前述した岡山県初等綴方教育研究大会で、同じ岡山県下で「調べる綴り方」に熱心に取り組んでいたとされている高畑稔より「生活をみる」の考えの正体を問われ、「ぎくりとさせられた」とある。それを契機にと思われるが「「子どもらしさ」のほかに、「子どものもつ問題」「子どもを取り巻く社会の問題」――それらに立ち向かう子どもの「生活への意気ごみ」「生活への考え方」の表現が綴り方の本道である、と考えるようになった」（以上京山 p. 110）とされている。

一方で、同研究大会での「生活指導とは、（略）とくに内面的な生活を深めるための指導を意味し、その指導は自然や生活を観察し、感受するという方法を通じてなされる」（京山 p. 109）とされていた。その影響を受けていたのであろうか。当時の時本は、「「子

どもの綴方」指導という理念に忠実であったから」、「生活指導は、特定の思想や政治以前のものとしてとらえ」、「北方性の綴方には、一線を画し、反発していた」（京山 pp. 110-111）。全国訓導協議会国語大会での報告も「「北方性の綴り方」に対抗する意識で作り上げた」（京山 p. 161）とされている。「生活をみる綴方」を重視はするが、あくまでも作文教育の「範囲にとどめ」る（京山 p. 111）綴方教育だったと言える。

『綴方岡山』創刊号に、「遊びを調べて説明する」と題して、時本が綴方指導した小学３年の「きばせん」という文例が紹介されている。時本は「都市児童」においては「家族の心遣いや学校での遊びや勉強」が綴方題材にならざるを得ないとし、３、4 年生においては「遊び」が適している。そうして、綴方の目標は「先生へ話して聞かせろ、先生がよくわかったというぐらい、はっきり説明」することに置いていたことが分かる（以上『綴方岡山』創刊号 pp. 9-12　旧字体・旧仮名遣いは改めた　以下綴方岡山）。

しかし、時本は指導したその綴方文例に対して、すでにその当時から「附属型の域を抜けきらぬとの批評は甘んじて受ける」（綴方岡山 p. 11）としていた。さらに、『京山綴り方抄』をまとめた1981（昭和56）年にも、当時の綴方教育を「「わたしの教室」の子どもを「しっかりした子どもに育てる」「綴る力を伸ばす」ための綴方であったから、はた目には附属の子どもの、小市民的な消費生活を表現したなまぬるいもの」（京山 p. 111）「きわめて普通の生活文を求め、掘り下げた研究や論文」（京山 p. 170）だったと、時本は振り返っている。

筆者の推察になるが、時本は本来生活綴り方を目指していた。ところが、時本が当時在職していたのは「都市」部にある師範学校附属小であり、「農山村児童」（『綴方岡山』p. 12）の実態とは大きく違っていた。それが綴方教育実践観にも影響を与え、思い悩んでいたのであろう。その違いから「北方性の綴方」への対抗意識を持つようになり、当時は「正常綴り方」（p. 170に「北方綴り方」や「南方綴り方」批判に気勢を挙げていたことからこのように呼称したものと推察される）を追求することになったものと考える。

なお、時本は、「柔く親しみ易いし、またさまざまな思い出ももっている」との理由から、この頃から「綴り方」と、「り」の仮名を送ることを習慣としてきた（京山 p. 111）と記している（京山 p. 122）。

⑹　県下・全国の仲間の中で生活綴方教育を磨いた時代

居住する地域の実態に違いがあり戸惑いつつも、生活に目を向けた綴方教育実践と、それを共有する「仲間」（京山 p. 169）づくりに時本は熱心に取り組んだ。

前述の岡山県初等綴方教育研究大会で「出席した会員二五〇名から子どもの作文を募り」、翌1928（昭和３）年に岡山県教育会として「小学校低・中・高の三部作」である「岡山児童文集」を発行させたことが記されている。「岡山ではまず文集の始まりであろう」（京山 p. 110）とされていることから、同研究大会は岡山県一帯に綴方教育が大きく

普及されていく力になったものと推察される。

また、時本はこの大会を契機にして、「誰の発案かは思い出せない」としながら、「綴り方合評の会」が1932「昭和七年頃から始まった」としている（京山 p. 169　p. 124では「岡山綴り方同人会」としている）。40人ほどいたとされている「仲間」には、「地帯性の綴方」で全国から注目されていた高畑稔、生活実用主義に立つ作品を数多く積み上げていたとされている亀山茂樹、野性的な児童詩を書かせていたとされている北原信一郎や西田弘、低学年の児童詩に純粋な作品を書かせたとされている小山玄夫（以上京山 p. 111）らの名前が記されている。

この合評会は、「月三名を当番」（京山 p. 169　勲章 p. 72には「二人」とある）とし、「綴り方を一文だけ印刷して配り、内容や文章を批判して貰い、その本文と批判を再び印刷してみんなに配る」システムだったとされている（京山 p. 169）。そうしてこの合評会は3年続き、「約百冊の合評記録を作り上げた」（京山 p. 112）。

その成果を時本は、「同人が「綴り方教育」に誇りをもち、「教育改造」の意欲を各校の職員の間に吹き込み、同人会の結束はいよいよ固くなった」（京山 p. 112）としている。ここから読み取れることは、1つには「生活綴り方」を「教育改造」する教育実践として合評会参加メンバーは捉えていたこと、もう1つには合評会そのものが「生活綴り方作品とは何か」「生活とは、綴り方とは、指導とは」「優れた作品とは」を深く探究する会となり、教育実践としての「仲間」から、綴方教育実践を深く探究する同志的結束を固めていったことが窺える。

さらにこの合評会の取り組みは、1936（昭和11）年の（京山 p. 112には「昭和十年秋」とあるが現物で確認）『綴方岡山』の出版に結実した。「季刊版三百部を発行し」（京山 p. 112　勲章 p. 74には「五百冊」）、「同人約五十人は、一人五冊ずつ受持ち」「岡山地方や近県の綴り方同人に頒布」（京山 p. 113）したとされている。

この他にも時本らは、1935（昭和10）年に附属小講堂に「千二百人位の会員を集め」たとされる綴り方教育研究大会で「文集展」を開催し、「三百種類数千冊」の文集を集めて展示・交流したとされている。その縁があって、さらに全国の指導者を招くことができるようになるとともに、時本らも近畿・中国地方に招かれて「その地の実践校のお手伝い」をするようになった（以上京山 p. 113）。

文集に寄せられている作品や名だたる講師による助言に触れるとともに、舌鋒鋭い高畑らが参加する合評会同志の批評活動を継続することを通して、さらには同時期に附属小主事に就いていた大森保平の「生活教育運動に激しい意欲」（京山 p. 113）をもつ指導も加わり、時本の「正常綴り方」は徐々に生活綴方として磨かれていったものと推察される。

(7)　短期現役兵時代と戦時下の青年学校長時代

1923（大正12）年、黒本小に着任した時本は、その夏に短期現役兵として歩兵第54連

隊第４大隊内務班に入営する（京山 p. 161）。当時病後であったことが配慮されて、教官付きの「六週間連兵休」として「軍隊というものを正しく理解して、幼いこども達の教育」、すなわち軍事教育に役立つ「体験」「見学」を命じられたのである（勲章 pp. 36-37）。教官付きの仕事をこなしながら、午後には軍事書物を読む時間があったとされている。そうした折であろうか、『種子まく人』（1921年刊）を兵舎で読んでいたとされている。

この他にも、兵役を終えてと思われるが、『改造』『文芸』『社会問題研究』（以上1919年刊）『日本詩人』（1921年刊）『文芸春秋』（1923年刊）『文芸戦線』（1924年刊）『蟹工船』（1929年刊）『第二貧乏物語』（1930年刊）等、時本曰く「左翼の本や雑誌」（勲章 p. 66）も読んでいたことが記されている。

しかし、「「リアリズム文学とは、これだ」と思うようになった」一方で、「蟹工船」については「押しつけがましい思想的なものに、わたしはついて行けなかった」とある（以上京山 p. 162）ように、読んでいた＝感化されていたとは限らない。プロレタリア・リアリズムの代表作品である『蟹工船』に対する時本の批評は、「北方綴り方」を批判していた視点に共通するものがあると推察される。

時本は、また「日本労農党結成後初めての総選挙」とあることから、第１回普通選挙が行われた1928（昭和３）年と思われるが、大山郁夫日本労農党委員長の岡山での演説会に参加したとある（京山 p. 162）。附属小に在職していた時期である。

しかし、「「弁士中止、弁士中止」の怒号におびえ、（略）履物もはかず、（略）飛び出した」とある（京山 p. 162）。そうして、1930（昭和５）年に、買い付けていた書店の『改造』購読者名簿から特高警察の捜索が入る可能性を感じ取って、「左翼の本を一切、宿直の夜風呂窯の下に炊いた」（京山 p. 122）。当時の心境を時本は晩年、「わたしは共産主義者でも政治運動家でもなかった。（略）ただ、多感小心な綴り方教師であるのに過ぎなかった」（京山 p. 163）とし、当時のこれらの行為を解説している。

1930年代に入ると、日本では軍部の台頭が庶民の生活にも影響を及ぼしてきていた。一方では命がけで天皇主権主義に反対する者と、もう一方では体制翼賛に加担する者とに分かれていった。時本の当時の行動は自ら後者を選んだことになる。

時本らの努力により発行した『綴方岡山』も、「弾圧と紙不足のため」（p. 124）に廃刊してしまう。さらに時本は、1941（昭和16）年児島郡（現岡山市南区）灘崎尋常小学校・青年学校長の就任も受け入れた。

それでも時本は、綴方や児童を大切にする教育に熱意を傾けてきた初心を忘れまいともしていた。「生活綴り方の精神を胸に置いて、「日本一の典型小学校」をつくろうと同僚の先生方に、夢のような話をした」（京山 p. 172）、「綴り方の二個学級だけは受持たせて貰い、子どもたちと離れなかった。同人会も年一度、わたしの奉職校に集まる」（京山 p. 115）、「学力テストに研究授業にしつけに、臨海学校に修学旅行に、戦争の最中だという

のにやりたいことはみなやった」（京山 p. 173）。また、黒本小児童の動物蛋白量の不足を感じて「大豆作り・鮒取り、いなご取り」をさせたり、「特製きなこ」を給食に出したりもしたとある（京山 p. 172）。

しかし、生活リアリズムを基調とする「北方綴り方」を批判し、体制翼賛の思想に流された時本は、「ご真影と子どもを守る以外に何も手につかない。日の丸を表紙につけた慰問文集を、同志と交換するのがせいぜいの実践であった」（京山 p. 116）、「子どもを見失った教育観の中で、限りある頁数の中に、生活綴り方をいかに生かそうとしたか、その困難さがよくわかるとされている国語読本教師用書であったが、出ていてもそれを手にすることもなく、生活綴り方をやる意欲も時間もなくしていた」（京山 p. 131）、「子どもの生活や感情を呼びもどすすべを、わたしたちはしらなかった」（京山 p. 171）、「少年志願兵は七十人くらい送り出した。県から表彰状をいただいたが、何かむなしい心持ちで、毎日が暗く不安でたまらなかった」（京山 p. 173）、「こどもとともに死ぬ時が、今だ、とわたしは思った」（京山 p. 174）という心境にあった。

戦後の時本の中には、戦中に体制翼賛の思想に流されていたことでの無力感、変質への悔恨の思いが窺える。「葦の葉より弱い青年教師」（京山 p. 161）とこの時代の自分を表現している。しかし、戦後に時本が再び校長となったときに、後述するが、プールで児童が溺死してしまう。そのことに対し深い悲しみと退職をも惜しまない覚悟を綴っている。それを読むと、敗戦を経てその後、尋常小学校・青年学校長時代をどのように総括し、自身や瀬崎村に対してどのように校長としての整理をしたのかが書かれていないことは惜しまれる。

生活リアリズムを追求しようとしていた時本が、時代に影響されたとは言え、明らかに変節した時期であった。

⑻　文部行政にたずさわった時代

時本の戦後は、1946（昭和21）年に吉備地方事務所教育課長に就任した記録から始まる。敗戦直後から同職に就くまでの経緯は記されていない。

また、翌1947（昭和22）年に小学校長に抜擢され、計３校で校長を務めた後、1953（昭和28）年に岡山市教育委員会の学事課長にも就任する。「もうすることではないと決心していたはずのわたしは、岡山市のその仕事を、また繰り返す破目になってしまった」（京山 p. 179）とある。時本は自身の力は教育行政ではなく、学校現場でこそ発揮できるものとして自己分析していたのであろう。本意ではなかったのであろうが、尋常小学校・青年学校長に就くことになって以来、教育行政組織の一員としての自分の立ち位置を感じるようになり、受け入れることにしたものと推察される。

その吉備地方事務所教育課長当時に、公文書として「学校運営協議会の手引き」が出された。ところがその文書に「協議会は、校長抜きで行なうのが好ましく」と書かれていたことから、時本は「民主主義とはこんなものかと頭をかしげた」とある（以上京山 p.

177)。時本の中には校長のリーダーシップ論が当時から明確にあったものと推察される。ところでその考えは、尋常小学校・青年学校長としての軍国主義・画一主義の中で根づいてしまった権限強化による考えなのであろうか、それとも効率的組織的学校経営の考えに基づく考えなのであろうか。

敗戦直後、戦前の画一教育への批判が根強かった当時ゆえ、県下の学校現場にも機械的労働者論の立場に立つ教員がいたのであろう。その立場に立つ教員に対して、「教育運動や階級闘争をいくらやっても、かんじんの、子どもをよくすることに情熱を傾ける教育実践を抜きにして、教育は前進するものではない」(京山 p. 179) という考えを時本はもっていた。「理不尽な権力に抵抗しながら、教育行政の筋を通す」姿勢を堅持し、そのためには「時間をかける」よう心がけていたようである (京山 p. 181)。「理不尽な権力」とは、前後の文脈から「授業の怠業」をしていた当時の一部であろう「組合」教員、恫喝的な議員、陳情、新聞記事と読みとれる (京山 pp. 181-184)。教育行政に係る重圧にかなりナーバスになっていたものと思われる。

しかし時本は、「人事に懲罰の意味が含まれていてはならない」「公正」「大局観に立つ方針を堅持する」として (京山 p. 180)「定員の獲得・将来への構図・学校差の解消など」(京山 p. 179) に精力的に努めていたようである。

1950 (昭和25) 年には岡山県教職員組合 (以下県教組) 作文コンクール審査委員長に就いたとある (京山 p. 201)。機械的労働者の立場に立つ教員や教職員組合を厳しく批判しているようであったが、学事課長を経て再び学校現場に戻った際には「私は校長と組合の間を往き来しながら、学校では職員会議に努力し、組合では文化運動に奉仕した」「組合の執行部の人たちも、気軽で便利な校長として待遇してくれた。わたしはそれを自分の役割と信じていた」とある (京山 p. 178)。

本音では批判的に思う教員もいたことであろうが、時本は職場における融和的関係、同僚性を重視しようとしていたものと思われる。校長のリーダーシップと職場における融和的関係は一見すると矛盾するように思える。しかし、自身が教育実践に奮闘するだけではなく、学校ぐるみである目標に向かって取り組んでいく学校にしていく上では、二者択一ではいけない。職場における融和的関係を築こうとする校長への信頼が、やがて職場における校長のリーダーシップを受け入れてくれるものとの考えがあったのであろうと推察される。時本の考える校長のリーダーシップ論は以上のような考えに基づくものである。現代日本における権限強化の「リーダーシップ」論とは異なるであろう。

時本の考える校長のリーダーシップは特に、最後の赴任校である鹿田小学校で結実していったと見ている。

(9) 戦後綴り方教育の普及に努めた時代

時本は吉備地方事務所教育課長を経て、1947 (昭和22) 年に倉敷市立万寿 (ます) 小

学校、1950（昭和25）年には岡山市立南方小学校、1952（昭和27）年には同石井小学校の校長に就く。その間、「綴り方時代の「ロマンの残党」としての学校づくり」を目指した（京山 p. 175）とあるが、これらの学校における綴方教育としての具体的な取り組みは記されていない。

しかし、1947（昭和22）年に時本も「名を連ねて」児童向け綴り方雑誌『岡山綴り方読本』（児童文化社）を出版した。「一万部は出したらしい。ついでに「児童文化」と名づけたリーフレットをおり込み、子どもの自由研究活動の情報交換をはかる試みをも始めた」とある（京山 p. 116）。

次いで、1949（昭和24）年には同じく児童向け綴方雑誌『草笛』（京山 p. 116）、1950（昭和25）年には年間文集「岡山っ子」、1953（昭和28）年には『作文岡山』、1955（昭和30）年には『働く子どもの作文』も発行している。

戻って1949（昭和24）年には岡山県国語研究会副会長や読売新聞綴り方コンクール審査員に、翌1950（昭和25）年には県教組作文コンクール審査委員長、1952（昭和27）年には岡山作文の会会長に就いたとも記録されている。この他にも、「岡山実践国語」の会、『草笛』編集委員会、県教組教育新聞・機関誌編集委員会、岡山県児童文化協会にも関わっていたことが記されている（京山 p. 176）。

実に精力的な働きぶりである。戦前から綴方教育に熱心に取り組んできたことが、戦中に中断したとは言え、戦後その機会を再び得ることになった。「やっと戦前の「綴り方岡山」同人の間に「作文岡山」を復活し」（京山 p. 125）とある。「年刊作文集「岡山っ子」は今も続いていることと思う」とある。「今」とは『京山綴り方抄』を出版した1983（昭和58）年であるが、少なくとも退職したのが1961（昭和36）年であるから、退職後にも引き継がれる貢献をしたと言えよう。それまでの苦労が実り、一気に開花したように見える。

ところで、「北方の綴り方」を批判して「正常綴り方」と対抗的に名付けていた綴方観はどうなったのであろうか。1950（昭和25）年に国分一太郎が「日本綴方の会」を立ち上げ、1951（昭和26）年には今井誉次郎を会長として「日本作文の会」が再出発する。ここには、1947（昭和22）年「学習指導要領国語科編（試案）」、1951（昭和26）年には小学校及び中学校・高等学校の改訂版「学習指導要領国語科編（試案）」が相次いで提示されてくる中で、綴方をどう位置付けるべきなのか、何をこそ綴るのか、どのように綴る力を磨くのか等が、戦後改めて見直されることが影響していたと思われる。そのような背景からか、岡山作文の会を「「日本作文の会」「作文の会」の下部組織にするか、独立したものにするか」「当分はお預けにし、子どもの生活作文の本体を追求しようということで仕事を始めた」（京山 p. 118）とある。

なお、時本の綴り方への熱意は、国語教育全体にも大きな影響を与えていたのであろう。1952（昭和27）年には『小学生の国語辞典』（勲章 p. 125には『中学生の国語辞典』

も作ったとある）を発行し、1954（昭和29）年岡山県小学校国語教育研究会長にも就き、『県国語』も発行したとされている（以上京山 p. 201）。

「綴り方時代の「ロマンの残党」」というネガティブな表現ではあったが、時本は戦後再び生活綴方を柱とした教育づくりを目指そうとしたことに間違いはなさそうである。

⑽ 「こどもひとり残さぬ教育」を追求した時代

1956（昭和31）年、時本は最後の赴任校となる岡山市立鹿田小学校（以下鹿田小）長に就いた。ここでは綴方教育に焦点化した実践が行われた記述は見られない。しかし、時本が追求していたのは綴方を通しても児童を大切にすることであった。鹿田小での時本の実績は、退職まで残すところの5年間を、児童を大切にする教育として集大成させたことであったと言える。

時本はその5年間、「毎年一回ずつ」「教育研究大会を自前に開き、学習改造の理論や、教材研究の結果をまとめた印刷物を作って、訪れる人に配った」（勲章 p. 153）とし、『京山綴り方抄』に「研究記録「鹿田教育」まえがき」として転載している（京山 pp. 134–152）。学校づくりのテーマは「こどもひとりを残さぬ教育」であった。

時本はここで、尋常小学校・青年学校長時代を振り返って「こどもの教育について犯した、重大な誤りを忘れてならない」と短く表現し、「人間としてのこども」「個人の尊厳」「個性」の尊重を「厳粛なもの」として受け止めた学校づくりをすると表明している（以上京山 p. 134）。

そうして、その具体化として「こどもひとりずつをみる」（京山 p. 135）として、特に「おくれたこども」に目を向け、学習内容や方法を「おくれたこどもをつくらない」「おくれたこどもを救いあげる」ものとして工夫し、「進むこどもを引き締め」（以上京山 p. 136）て、「学習の協同化」を培い、「能力差を救う」（以上京山 p. 137）ことを目指した。『京山綴り方抄』には、1963（昭和37）年に『教育時報』に連載したとされている「わが教育生活」が転載されているが、その第4回に当時の教育構想がコンパクトに紹介されている。学習指導、学級経営、地域や家庭との連携、学校内組織のあり方など、「こどもひとりを残さぬ教育」を学校全体で実現しようとしていたことが窺える。

その鹿田小において特筆されるべきもう1つは「特殊教育」、現代で言う特別支援教育をスタートさせたことである。「研究記録「鹿田教育」まえがき⑸」（京山 pp. 148–152）に詳しく紹介されている。まず「特殊なこどもはある、多い」と定義づけている。これは恐らく文部行政校・校長会・教員組合等とのネットワークの中で得た情報なのであろう、「昭和三十六年度において、岡山県下に小中合わせて二十六学級の精薄児特殊学級の希望がある」（以上 p. 148）と記されている。そうして、「特殊なこどもも、こどもである」として、健常児と同じように尊重されるべきとした。そのために、「特別な環境」「特別な教育課程」「特別にやさしく、行きとどいた先生の手で」（以上京山 p. 149）育てられること

が必要であり、「特殊学級や養護学校が必要」（京山 p. 150）としていた。そうして、着任とともに（京山 p. 150には「昭和三十年五月」とあるが、昭和30年は学事課長に就いていたので1956（昭和31）年の誤記と思われる）、その鹿田小に岡山市では「はじめて」の「特殊学級―精薄児学級」がつくられたとされている（京山 p. 150）。

その「特殊学級」充実のために時本は、「安藤恵三君を鹿田小学校に迎える」（勲章 p. 120）ことにした。安藤恵三とは、時本が審査員をしていた読売新聞綴り方コンクールで、「津山第二小六年生片山守君の「家のこと」」で、小学校部門で第一位に入選した作品の指導者である。「指導者安藤恵三君は綴り方人というより、精神薄弱児の教師として、今も輝く業績を積んでいる」（以上京山 p. 117）ほどに、「特殊教育」の指導者として絶大な信頼を置いていた。その安藤を呼び寄せて、その充実をはかったことが分かる。こうした功績が認められたのであろう。時本は、校長として鹿田小に着任した年に岡山市薄弱児育成会長にも就いている。

一方で、時本が校長として就いての３年目に、水泳指導中の児童が溺死してしまう。「学級数四十六、子ども二千五百人」もいた大規模校であり、その日時本は臨海学校で引率参加していたこともあったが、校長としての時本は遺族等への対応に当たる一方で、「退職届」を出すほどに「何という失態」（京山 p. 189）「教育の過誤についても、きびしい自己反省の日々を送らねばならぬ」（京山 p. 147）「こどもひとりをのこさぬ教育は、七月二十一日の白昼、一瞬、一枚の反故紙として破れ去り」（勲章 p. 155）の心境に至るまで苛まれた。

⑾　寄稿を通して綴方教育の継承を追求した時代

教育現場を退いた時本はその後、在職中に孤児救済に尽力した石井十次の研究をしてきたこともあり、医療現場の庶務課長・事務長などを歴任していく。

しかしその間も、岡山作文の会等で同志的関係にあった教員とのつながりは欠かさなかった。時本の綴方教育における情熱は、『作文と教育』に掲載されたとされている「作文に取り組む若い人々へ」に象徴されるように、退職後も抱き続けられていた（京山 p. 125 1972（昭和47）年掲載とされている）。

1962（昭和37）年『教育時報』に「わが教育生活」1-4を連載、1967（昭和42）年には『作文と教育』に「岡山県生活綴り方運動史」、1972（昭和47）同誌に「「岡山綴り方同人会」のこと」、1975（昭和50）年『作文岡山』に「農村綴り方の開拓者　高畑稔」、1976（昭和51）年『東苑』に「千葉先生と岡山」、1977（昭和52）年『生活綴方』に「生活綴り方は生きている」、1978（昭和53）年『生活綴方』に「生活綴り方の復活」、同年『作文と教育』に「あの日、あのこと」、1979（昭和54）年『生活綴り方』に「高畑稔素描」などを寄稿して、自身らが取り組んできた綴方教育を紹介することで、後世の教員にその実践の継承を託している。

３．時本が目指した綴方教育の考え

⑴　一貫して綴方教育を重視する

今回の研究で目にした文献から感じることは、綴方教育に情熱を燃やしたという点で時本の教育は一貫していたということである。

２で見てきたように、時本の教育実践は戦前に『赤い鳥』に触発されて以来綴方教育を重視してきた。鹿田小時代では綴方教育実践は前面に出ていないものの、「生活綴り方の精神を心の奥深いところに置き」（勲章 p. 151）とある。すなわち、時本が目指した鹿田小の教育もまた「生活綴り方の精神」によって形作ろうとしていたのであって、この点からも時本は一貫して綴方教育を重視したと言える。

そうして、その功績は『岡山国語』第２号巻頭に寄稿したとされている「教育実践は由来孤独である」「教育実践は孤独であるから、教育運動はなおさら必要である」（以上勲章 p. 116）として、全国のみならず岡山県下の地方サークルにまで言及するほどのネットワークを築き、自身の教育実践・教育観を磨くとともに、同志としてともに研究と実践を切磋琢磨・共有しながら育ち合う教育実践研究集団を築き上げていった。岡山県のみならず全国の綴方教育を重視した教員に計り知れない影響を与えたことが十分推察される。この功績は実に輝かしい業績であったと言える。

⑵　時本が求めた綴方教育

一方で、その綴方教育をどのように捉えて、どう指導したのかという点では決して一貫していたとは言えない。尋常小学校長・青年学校長に就いた時には、時流に流されて「日の丸を表紙につけた慰問文」を書かせていた（京山 p. 116）のが端的な例である。

しかし、教育実践観が変わることは、１つには教員としての内的成長から起こり得るとともに、もう１つには社会の変化等の外的要因によっても起こり得る。後者で指摘するならば、戦前から綴方教育を重視してきた教員の中にも戦中に変節した例も見られる。中には戦後民間教育研究運動で日本の綴方教育を主導してきた者もいる。教育は、時の社会状況に多分に影響されるとともに、教育行政の管理体制が強まれば強まるほどに迎合か反発かに枝分かれする。

以上のことを踏まえて時本の求めた綴方教育を概括してみると、綴方教育の考えを以下５期に分けて捉えることができると考える。

①　『赤い鳥』に触発されて自由選題で綴方教育をしていた時代
②　生活リアリズムに目を向けて書かせようとした時代
③　「正常綴り方」を追求しようとした時代
④　軍事体制に迎合し日の丸を表紙につけた慰問文集を作らせた時代
⑤　戦後綴方教育の継承に努めた時代

①から④については、２で紹介してきた。そこで、ここでは自ら認めた戦中の実践上の

誤りも含めて自身が悩みながらも築いてきた綴方教育観に加え、戦後の小学校学習指導要領及び自らも参加していたと思われる日本作文の会の動向を経て築いていった綴方教育についてまとめることにする。

1978（昭和53）年『生活綴方』に「生活綴り方の復活」と題した以下の文章を『京山綴り方抄』に転載している。「岡山作文の会主催の恒例作文教育講座に出席し」、「多少の感慨を覚えながらも」、兵庫作文の会の戸田唯巳氏の講演について、「表現技術の習得」「簡易で効率的な指導法のみを求めておられるように見受けられる」とし、さらに当時の学習指導要領を「作文教育を精神的にスポイルしている罪過の大きいことを、改めて痛感する」（以上京山 p. 129）として批判し、「作文教育を、生活綴り方の原点に引き戻さねばならない」としている（京山 p. 130）。

その「生活綴り方の復活」の「二 生活綴り方の狙ったもの」には、「子どもたちを、じかに自分の生活に向かわせ」、「生まの生活のなかから、書きたいことを捉えさせ」、「生活の認識を高め」、「自分の生活ばかりではなく、みんなの生活に役立つよう」にしていくものとして綴方教育実践を紹介している。そうして、「生活文や生活詩から出発し」、「生活認識を広げ深める必要から、子どもたちが自発的に地域や生産と労働の問題についても「調べる綴り方」を書くようにみちびき、また記録したり批評・感想文なども書くように指導の手を広げていった」（以上京山 p. 127）とも記している。さらにそうした綴方を「読んで考えさせ、ガリ版文集を作った。それを子どもたちに教室で読ませるだけではなく、校内や親たちに配り、全国のなかまたちにも送って交流をし、はげましあった」としている。そうして、それらの活動は「弾圧を受け、戦時中は「非国民」視されながら生きぬいて、今日において誇り得る業績をのこしている。」（京山 p. 128）と総括している。

さらに生活綴方の画期的な教育観は、「有名・無名・中央地方無数の人々が、よってたかって、生活綴り方時代といってもよい特異な勢力と業績をつくり上げた、そのことに刮目したい」「生活綴り方の理論と実践の確立は、昭和初頭の思想・教育思想の根底に迫る、大げさに言えば教育革命の先駆的任務を果たしたといってよい」（京山 p. 131）とも記している。

一方で、1968年改訂学習指導要領の作文教育を「綴り方独自の考え方をぼかし、踏み消してしまうことになる」（p. 132）「国民学校国語科教師用書、昭和二十二年二十六年試案にのせてあった、子どもの生活に関わりある多くの部分を切り捨ててしまったことは、何としても惜しい」と痛烈に批判している。また、「日教組の教育研究集会も歯痒い」（京山 p. 132　日本教職員組合主催の全国教育研究集会国語教育分科会で報告される作文教育を指しているものと推察される）としている。

戦後は文部行政や校長として学校教育に携わってきていたため、自身の綴方教育実践を深めることは出来なかった。しかし、様々な活動の中で教育実践の中で生み出されてきた綴方作文に触れ続けてきていたことと、その綴方作文の指導に関わる学習指導要領や民間

教育研究運動の動向に関心を持ち続けていたから、時本の綴方教育論はさらに磨かれていたと見るべきである。

戦前の時本自身の綴方実践は、その時々の影響を受けてその教育観は良くも悪くも変わっていった。しかし、そうした経験もあったからこそ、何が大事かを磨き続けてきたと言えるのではないだろうか。1978（昭和53）年『生活綴方』に寄稿した「生活綴り方の復活」は、時本が磨き上げてきた綴方教育論を鮮明にしている（推定75歳）。文章力をつけることを主目的している近年の「作文」教育にとどめず、現代の教育において欠けてきていると言わざるを得ない「生活をみる」「生活を調べる」教育を見直し、そこに焦点化した生活綴方教育が現代日本には必要であることを伝えようとしている。多難な時代に翻弄されながら磨いてきたこの教育観を決して埋没させてはならないのではないだろうか。

謝辞

貴重な本研究に当たれたきっかけは松本達郎氏の資料提供にあった。

また、本研究の対象とした時本堅の貴重な資料が蔵書されているところとして突如訪問させていただいたにも関わらず、閉庫されていた資料を提供して下さったり、コロナ禍で長時間滞在は制限されていた中で終日資料に当たることを認めて下さったりした岡山市立中央図書館職員の方に大変お世話になった。

心より感謝申し上げたい。

時本編著以外の参考文献

中野光『大正自由教育の研究』1968年 黎明書房

川合章『日本の教育遺産』1993年 新日本出版社

川合章『生活教育の一〇〇年』2000年 星林社

唐澤富太郎『近代日本教育史』第10版 1980年 誠文堂新光社

船山謙次『戦後日本教育論争史』第14版 1976年 東洋館出版社

日本児童教育振興財団編『学校教育の戦後70年史』2016年 小学館

須田実『戦後国語教育リーダーの功罪』1995年 明治図書

鈴木和正・浦川末子「岡山県における生活綴方教師の国語教育実践」2014年『長崎女子短期大学紀要』第38号 pp. 125-132

飯田和明「1930年代論と『綴方生活』」2009年 筑波大学日本語日本文学会『日本語と日本文学』第49号 pp. 22-39